
おくりびと

完成台本

2007年8月10日現在

登場人物

小林大悟		本木雅弘
小林美香		広末涼子
佐々木生栄		山崎 努
上村百合子		余貴美子
山下 猛		杉本哲太
山下ツヤ子		吉行和子
山下理恵		橘ゆかり
山下詩織		飯塚百花
平田正吉		笹野高史
小林淑希		峰岸 徹
大悟の母親		星野光代
大悟の少年時代		内田 琳
大中禎詞		朱 源実
曾根崎		石田太郎
楽団の事務員		山中敦史
楽団・同僚のトロンボーン奏者		奥田達士
楽団・大悟の同僚		宝井誠明
菅原家・留男の母親	小柳友貴美	
菅原家・留男の父親	大谷亮介	
菅原家・留男の叔父	岸 博之	
菅原留男		白井小百
合		
菅原家・おりんを鳴らす老婆		服部美也
子		

佐々木「最初にしてはちょっとな、刺激が強過ぎた」
 佐々木、大悟の肩をたたいて、観葉植物に水をやる。
 大 悟「……」
 仕事をしながら静かに大悟の様子を見ている上村。
 上 村「……」

富樫家・喪主		山田辰夫
富樫なおみ		宮田早苗
富樫家・なおみの弟	佐藤丈樹	
富樫家・なおみの娘	阿部美里	
加藤家・ミユキの父親		諏訪太郎
加藤家・ミユキの母親		石垣光代
加藤家・ミユキの叔父		鈴木良一
加藤ミユキ		黒沢有希
加藤家・少年A		黒木啓嗣
加藤家・少年B		高橋 樹
加藤家・少年C		足利翔一
斉藤家・亡くなった老婆	藤 あけみ	
斉藤家・老婆の孫		工藤未奈
太田家・亡くなった野球少年		若林航平
太田家・少年の父親	荒木 誠	
太田家・少年の母親	真下有紀	
太田家・葬儀に参列した少年の友達A		古川龍海
太田家・葬儀に参列した少年の友達B		小越勇輝
太田家・葬儀に参列した少年の友達C		丸山 隼
奥山家・故人の妻		橘 ユキコ
奥山家・キスをする娘A	はやしだみき	
奥山家・キスをする娘B	林田麻里	
奥山家・ハゲ頭の故人		ト字たかお
奥山家・親戚のハゲ男		佐藤吉兵
奥山家・キスをする娘Bの娘		松田七星
楽器買い取り専門店の主人		久保木
大		
楽器買取専門店の鑑定士		パプロ・サツ
コ		
佐々木の妻(遺影)	今本洋子	
撮影スタッフ AD	城戸裕次	
撮影スタッフ 監督	鎌田国男	
撮影スタッフ 美容師		菅原比呂
美		
バスの中の女子高生		石川有砂

バスの中の女子高生	平塚千恵
バスの中の女子高生	河合 圭
電報配達人	笠 兼三
漁協の係員	坂元貞美
葬儀業者 A	樋渡真司
葬儀業者 B	大橋 亘
指揮者	飯森範親
	山形交響楽団
	酒田市 第九を歌う会
	酒田フィルハーモニー管弦楽団
	山形県庄内の皆さん
	山形県上山の皆さん
	クロキプロ 吉川事務所

佐々木の声「ちょっと手貸して」
 大 悟「一 はい」
 大悟、部屋の方へ。
 佐々木、ご遺体に合掌して、盛り上がった掛け布団をはぎ取る。
 大 悟「うニ」
 大悟、その臭気に思い切り顔をゆがめる。
 佐々木「足持って」
 躊躇する大悟。
 佐々木「足!」
 大 悟「!……はい……」
 大悟、あわててゴム手袋をつけ、ご遺体の足元へ。
 大 悟「…(独り言のように)見てだけでいいって言ったじゃないですか…」
 佐々木「そーっと、優しく」
 大悟、うなづいて、持とうとするが…出来ない。
 佐々木「ちゃんと持てニ」
 大 悟「!はいつ」
 大悟、仕方なく足を持った瞬間、その場に嘔吐する……
 大 悟「オエツ……」
 大悟を見つめている佐々木
 大 悟「すいません…すいません…オエツ……すいません…すいません…
 …」
 大悟の目から涙がこぼれる。

27A NKエージェント・表

← 実景

28 NKエージェント・内

ショックのあまり、呆然としている大悟。
 大悟の目の前に差し出される、二万円の現金。
 顔をあげると、佐々木がいる。
 佐々木「今日はもう帰っていいよ」
 大 悟「……」
 大悟、弱々しくお金を受け取る。

ハエ

現場は一人暮らしの老人が住む小さな集合住宅。
パトカーが停まっていて、警官がいる。
二人の車が到着し、佐々木、降りて玄関へ。
後についていく大悟。
家の前で待っている、葬儀屋『大佛堂』の社長、大中禎詞。

佐々木「お待たせしました」

大 中「おお、ご苦労さん、ご苦労さん！」

佐々木「ご遺体は？」

大 中「一人暮らしの婆さんでの、死後2週間。結構、痛んでるさげって、気を
つけての」

大 悟「……」

大 中「ではの」

大中、去って行く。

大 悟「誰ですか？」

佐々木「葬儀屋。オレたちの雇い主」

佐々木、短くなるまで吸っていたタバコを消して、

佐々木「さあ、じゃやるか」

車の後部へ荷物をとりに行く二人。

家に入った瞬間……

大 悟「うっ!くさっ」

悪臭が鼻をつき、大悟は吐き気を催す。

部屋中に散乱した腐った食べ物に蛆が湧いている。

部屋の奥には、人の形に盛り上がった布団が敷かれており、
足がはみ出ている。

牛の鳴き声

大 悟「!」

佐々木、大悟の持っていた納体袋を取り、ゴム手袋を渡して、

佐々木「はい、こっち」

大 悟「へ？」

佐々木、家の奥へと進んでいく。

大悟、涙目になりながら佐々木に続く腐ったバナナを踏む。

大 悟「!うええ」

松竹タイトル

TBSタイトル

ㄠ 冬の庄内平野

雪化が降りしきる庄内平野の田舎道を一台の古いライトバン
が走っている。

ㄡ 車 内

運転席でハンドルを握っているのは、新人納棺師の小林大悟。

大悟M「子供の頃感じた冬は、こんなに寒くなかった」

車の助手席には、納棺専門会社の社長、佐々木生栄。

雪の降る中を走っていくライトバン。

大悟M「東京から山形の田舎に戻ってもうすぐ二ヶ月。思えば、なんともおぼ
つかない毎日を生きてきた」

ㄣ 民家・外(菅原家)

晴れ上がった空の下、雪深い山間に建つ一軒の民家の前に
ライトバンが停まっている。
『忌中』の札が出ている。

ㄤ 同・居間

遺族たちが集まっている。

故人の母親らしき人物が呆然としている。

お手伝いに来ていた女性が

女 性「どうぞ、こちらです」

と、佐々木と大悟を案内する。

佐々木「失礼いたします」

大 悟「失礼します」

居間に入ってくる佐々木と大悟。

父 親「おい…」

母親を促す。

沈鬱な様子の遺族たちの間を抜け、喪主の対面に正座する
佐々木と大悟。

佐々木「この度は誠にご愁傷様でございます。(一礼)ご納棺のお手伝いに
参りました。ご焼香させていただいてよろしいでしょうか？」

泣きながら顔を母親と親戚たち。

母 親「はい…ありがとうございます」

× × ×

ご遺体の前に設えられた前飾りで焼香をする佐々木と大悟。

× × ×

佐々木が白布をめくると、故人は長い黒髪の美しい女性だ。
ご遺体を前に準備を始める佐々木と大悟。
作業の手を休めずに佐々木に囁く大悟。

大 悟「まだ生きてみたいですね」

佐々木、綿花を切り分けながら同じく囁く。

佐々木「たぶん練炭自殺だ」

大 悟「どうして分かるんですか？」

佐々木「痛んでない。寒い車内で死んで、発見が早いとこうなる」

大 悟「美人なのに」

佐々木、大悟をみつめて、

佐々木「やってみるかい？」

大悟、しばらく考え、

大 悟「はい」

次の準備へと移る。

× × ×

大 悟「それでは只今より、故人様の安らかな旅立ちを願ひまして、納棺の
儀、とりおこなわせていただきます。皆様、どうぞお近くで、お見守り
ください」

遺族たちが布団の近くに集まって来たのを確認して、
大悟、合掌してから遺体の顔の状態確認を始める。
その後、腕のストレッチへと作業を進める。

と、立ち止まる。

美 香「顔、どうしたの？」

大悟、焦る。

大 悟「…髭剃ってたら、社長に押されてさ……」

美 香「会社で髭剃ったの？」

大 悟「……うん」

歩き出す大悟。

美 香「うちでも電気カミソリしか使わない人が？」

大 悟「……社長命令だったんだから、仕方なかったんだよ。大丈夫、大丈
夫、たいしたことない」

靴を脱ぐ大悟。

美 香「……変な会社」

大 悟「ホント 変、変」

階段を上る途中でこける大悟。

大 悟「変な会社」

そのまま、上がっていく。

美 香「ふっ(薄笑い)…」

24 街

走るNKエージェントのライトバン。
運転する大悟と助手席の佐々木。

大悟M「初仕事は突然、訪れた」

25 車 内

緊張した顔つきでハンドルを握っている大悟。
佐々木は助手席で、腕時計と結婚指輪を外している。

大 悟「あのう、僕は何をすればいいでしょうか？」

佐々木「今日は…今日は見てるだけでいいや」

大 悟「は、はい」

佐々木「しかし、アレだな。悪い時ぶつかっちゃったな」

大 悟「え、どういう意味ですか？」

佐々木「あいや、ま、行けば分かる」

大 悟「そんな、おどかさないでくださいよ」

佐々木「ご遺体の肌は、思いのほか傷つきやすいものでございます」
大悟、鼻の穴についたクリームが気になり、ムズムズしている。
佐々木「指をあてただけで、皮が剥がれてしまう場合がございます。それゆえ、」
佐々木、大悟の髭を剃り始める。
佐々木「慎重に、丁寧におこなわせて頂き……」
耐え切れなくなった大悟がクシャミをし、佐々木の手元が狂って大悟の顔を傷つけてしまう。
大悟「イテッ!イテッ!」
佐々木「あれ?」
大悟「イテッ!イテッ!イテッ!イテッ!」
佐々木「あれあれ?」
大悟「痛〜(傷を抑えた手に血がついているのを見て)あ〜〜!イテッ!あ〜〜!」
佐々木「あれあれ〜」
佐々木、大悟の顔の傷を見て、触ってみる。
大悟「イテッ!あいた〜」
顔を背ける大悟。
佐々木「大丈夫、大丈夫、大丈夫、たいしたことない、たいしたことない……」
撮影は中止となり、現場は大騒ぎとなる。

2 大悟の自宅・1階

パソコンに向かい仕事をしている美香。
帰ってくる大悟。
美香「お帰り」
大悟「ただいま」
美香、顔を上げて大悟の顔を見る。
大悟のあごにバンドエイドが貼られているのに気づく。
美香「……」
大悟「……」

← 大悟、
冷静を装い、歩き出すが、美香の視線を感じて、
大悟「何?」

傍らで見守っている佐々木。
遺族の鳴らすお鈴の音が響く静謐なムードの中、黙々と作業を進める大悟。
故人の着ていた浴衣を、遺族からは見えないよう布団の下で上手に脱がせ、今度はその浴衣を布団の上に被せ、布団を抜き取る。
大悟の流れるような作業を興味深そうに見ている遺族たち。
洗面器の湯に綿花を浸け、洗体の準備をする。

大悟「それではお体を拭かせていただきます」
合掌して両腕を拭き始める大悟、布団の中に手を入れて手探りで体を拭いてゆく。
その手は首元から胸、腹部へと徐々に下へ。
そして手が局部に届いた時、大悟の表情が凍り付く。

大悟「ん?…ん?」
大悟、布団の中からゆっくりと手を抜いて、佐々木に耳打ちする。

大悟「ついているんですけど……」

佐々木「何が?」

大悟「アレです」

佐々木「アレって?」

大悟「だから、アレです」

不審に思う佐々木、故人の方を見る。
特に変わったところは見当たらない。

佐々木「?」

大悟、湯に浸した綿花を佐々木に手渡す。
受け取った佐々木、遺族に一礼し、浴衣の下に手を入れ、股間のあたりを拭き始める。
そして、「アレ」を確認する。

佐々木「ん?…んん?…」

佐々木の様子に反応する故人の母親たち。
佐々木、しずしずと遺族側へと回り込み、近くにいる親族に小声で話しかける

M2:2'36"

佐々

← 木「あのう、ちょっとよろしいでしょうか?」
親族(母の弟)「はい、何か?」

佐々木「これからお着付けをした後、故人様にお化粧をするんですが、女性用のお化粧と、男性用のお化粧がありまして……」

親 族「ああ…ちょっと待っての」

佐々木「はい」

隣にいる故人の母親に尋ねる。

親 族「姉さん、留男の化粧をどっちさするかって？ 男さする？女子(おなご)さする？」

母 親「……」

親 族「のう どっちさ？」

母 親「(あっけらかんと)おいが最初から、おなごに生んであげてたら、こんなことに、ならねかったのに…(と、横にいる父親を見る)」

父 親「—(ちらっと母親の方をみる)」

母 親「…種がのう…」

父 親「—!(母親をにらむ)」

母 親「(見返す)」

親 族「おなごでええんやの?おなごで?」

母 親「(頷く)ええ」

親族、佐々木に、

親 族「女をお願いします」

佐々木「かしこまりました」

× × ×

老婆のお鈴がチーンと鳴る。

× × ×

父親が遺影を手にしている。

遺影の中では高校生時分の詰襟、イガグリ頭の故人が微笑んでいる。

父 親「留男……」

× × ×

大悟、留男の体を横にして、浴衣の袖を胸元に寄せ、背中を拭き始める。

その画に

メイン・タイトル

『おくりびと』

大 悟「あの、これ、どこで流れるんですか？」

佐々木「大丈夫、大丈夫。業務用のDVDだから、誰も見やしないよ」

大悟、怒りと恥ずかしさと情けなさが入り混じる表情を見せる。

× × ×

ビデオカメラのモニター画面。

舞台の上、布団の上に寝かされている大悟。

佐々木がその傍らに座り、ビデオカメラ目線で解説している。

佐々木「ご納棺にあたり、まず最初に、含み綿と湯灌を行いま

す。湯灌には、この世の疲れ、痛み、煩悩を洗い流し、

同時に、あの世に帰る為の、逆さ産湯の意味があります」

カメラ、ビデオモニター画面からズームバックすると、ビデオカメラの横でADがカンペを持って立っている。

× × ×

佐々木、洗面器の湯に綿花を浸し絞る。

佐々木「古くは、たらいに湯を張り、洗い清めておりましたが、今では衛生上の理由から、このように、消毒液を浸した綿で、お体を、お拭きしております」

佐々木、大悟の手を拭き始める。

目をつむっている大悟、なにかこそばゆい。

× × ×

仏衣を着付けている佐々木。

佐々木「お着付けは、故人様の尊厳を守る為、ご遺族の皆様にも、故人様の肌が見えないよう、細心の注意をはらって、行っております」

× × ×

ADがカンペをめくる。

佐々木(オフ)「お支度が整いましたら、」

× × ×

佐々木「お化粧を施す前に、お顔剃りを致します」

佐々木、髭剃り用のクリームを大悟の顔に塗る。

佐々木「特に男性は、顔の筋肉の収縮と、肌の乾燥の為、髭が伸びたように見えてしまうので、念入りに行わさせていただきます」

M14 : 1'46”

佐々木、フェザー(剃刀)を取り出し、

し、

る。

佐々木「あの一、うちの新人、ええー…」

大 悟「(佐々木に小声で)小林です」

佐々木「小林くんです。今日のモデルです。よろしくお願いまーす」

大 悟「モデル!？」

大悟の驚きは、スタッフの拍手に掻き消される。

ADが大悟に駆け寄る。

A D「着替え終わったらすぐに撮影始めますので、よろしくお願いまーす」

続いて、ヘアメイクを担当している地元の美容師が、

美容師「せば、あちらで着替えと、メイクをしてもらっての」

大 悟「メイク？」

美容師「うん。はい」

美容師、大悟を引っ張っていく。

大 悟「社長……」

佐々木「大丈夫、大丈夫! お願いまーす」

美容師「はーい」

大悟、舞台脇に連れて行かれる。

祭壇が生まれ、その前に棺と布団がある。

ブツブツとコメントの練習を繰り返している佐々木。

手にしている台本には『納棺の手引き』というタイトルが見える。

佐々木「……ご納棺にあたりまず最初に、含み綿と湯灌をいたします。湯灌には…この世の…」

佐々木は『納棺の手引き』というビデオを制作しようと考えているのだ。

美容師「モデルさん、入りまーす」

大悟の着替えが終わり、先に美容師が出て来て、支度部屋の仕切りを開く。

そして現れた大悟は……

おむつだけをつけたほぼ全裸の状態。

しかも顔、首周りと手足を血の気を失った遺体のように青白く塗られている。

スタッフたちがニヤニヤしながら大悟を見る。

苦笑いをする大悟。不安そうに佐々木を見る。

佐々木も台本から目を離し、大悟を見て、

佐々木「ん、いいじゃない」

黒バックに字だけが残り～㊀・㊁

㊀ 都内のホール

クラシックのコンサートホールで演奏されるベートーヴェン「交響曲第九番 二短調作品125」

オーケストラの中でチェロを演奏している大悟。

まばらな客席の真ん中に座っている老人の顔が険しい。

複雑な表情で舞台をじっと見つめている。

㊁ 同・楽屋

楽団員たちがそれぞれの楽器をケースにしまっている。

大悟が同僚のトロンボーン奏者と話をしている。

大 悟「ああ～、今日も少なかったですね」

同 僚「ああ」

大 悟「もっと宣伝にも力入れたほうがいいと思うんだけどなー」

同 僚「……」

大 悟「そうだ! 楽団のホームページ、作りませんか? うちのかみさん、ウェブデザイナーだからタダでやらせますよ。どうすかね、どうすかね」

同 僚「それよりさ、大悟君大丈夫?」

大 悟「何がですか?」

同 僚「次だよ、次」

大 悟「次って……?」

同僚、大悟のチェロに目をやり、

同 僚「無理していいヤツ買ったんなら、次探しとかないと」

大 悟「……」

そこにスーツを着たサラリーマン風の男ともう一人が現れる。

楽団を運営している事務員たちだ。

事務員「え～、みなさん、本日もお疲れ様でした」

一 同「お疲れ様でした」

事務員「客席はやや寂しかったものの、演奏内容は素晴らしかったと思います。(その先の言葉をためらう)え～と、実はですね、今日はそのう……当楽団のオーナーである、曾根崎さんから、みなさ

1'51" エン

「交響曲第九番 二短調作品 125」

第四楽章 冒頭部分 ～ 合唱部分



んにお話があるということですので、ちょっと、お聞きください」
事務員が下がり、後ろにいた老人が前に出る。
先ほどの客席中央にいた老人である。

會根崎「……」

言葉が出ない。
が、その表情から、楽団員たちはこれから発せられる言葉を何
となく予感している。大悟を除いては！

會根崎「……。 (無念の表情で) か…解散…します」

大 悟「？」

驚いているのは大悟だけだ。
他の楽団員たちはため息をついて、そそくさと引き揚げていく。

同 僚「じゃあな」

大 悟「……」

たった一人残される大悟。

大悟M「ようやく掴んだオーケストラ奏者という職業。それは一瞬にして、」

ㄣ 夕暮れの湾岸・実景

大悟M「過去の思い出となった」

∞ 大悟のマンション・室内 (居間)

部屋の片隅に置かれているチェロを、大悟はぼんやりと見つ
めている。

大悟M「このチェロには何の罪も無い。僕のような人間に買われたばかりに、
仕事を失ってしまったのだ。あらゆる意味で、このチェロは、僕には
重た過ぎた」

大 悟「……」

玄関扉が開く音がする。
美香が帰って来たようだ。

美香の声「ありがとうございました。」

隣人の声「早く食べてね」

美香の声「はい」

隣人の声「じゃ、またねー」

美香の声「失礼します」

M4:48"

大 悟「結構重いんですね」

上 村「棺も色々あるのよ」

上村、並んだ棺を左から順に指しながら、

上 村「5万、〇万、〇万！」

大 悟「そんなに違うんですか？」

上 村「左のは合板で、次が金具つきの二面彫り物。で、一番高いのが、総
檜」

大 悟「はあ〜。素材と飾りの違いですか？」

上 村「そう。燃え方もおんなじ、灰もおんなじ。人生最後の買い物は、他人
が決めるのよ」

大 悟「なんだか皮肉ですね」

電話が鳴り、上村が出る。

上 村「はい、NKエージェントです。 はい、いますけど。はい、港座です
か？ 今すぐ、はい。」

大悟、上村の対応の様子を察して、

大 悟「社長さんですか？」

上 村「仕事！」

大 悟「仕事…」

大悟、仕事内容に不安を感じている。

㉒ 鈴政通り

メモ書きを手に探しながら歩く大悟。
潰れた映画館の階段をのぼる。

㉓ 港座ビル・内

ロビーを抜け、劇場の扉から恐る恐る入っていく大悟。
中を覗くと何かの撮影が行われているようだ。
数人いるスタッフのうちの一人が大悟に気付く。

A D「NKの人？」

大 悟「はい」

A D「いらっしやいました」

と、舞台にいる佐々木に声をかける。

佐々木「おお、来た来た」

佐々木、大悟を手招きして舞台上がらせ、スタッフに紹介す

大 悟「(苦笑い)」
上村、再び、棺の手入れを始める。
大悟、上着を脱ぎながら、その棺をまじまじと見る。
棺は三つあるが、どれも微妙に違う。
上村、その視線に気づき、振り返る。

上 村「そんなに珍しい？」
大 悟「本物は初めて見ました」
上 村「初めて？」
大 悟「ええ。祖父母は記憶のない時に亡くなりましたし、母親の時も、ちよ
ど海外に出かけてて、戻ってきたらお墓の中でしたので」

上 村「お父さんは？」
大 悟「僕が6歳の時に女を作って出ていきました」
上 村「……お母さん、寂しかったでしょうね」
大 悟「……」
上村、次の言葉を見つけれず、再び棺を拭き始める。
大悟、名刺を手に取り、中身を見る。

大 悟「一でも、死んだ人を見たこともない人間が、こんな仕事できるん
でしょうね？」

上 村「そのうち慣れるわよ」
大 悟「(苦笑い)死体に？ですか？」
上 村「うん」
大 悟「一」
上 村「陽気がいいからココのところ暇だけど」
上村、棺の蓋を重そうに持ち上げる。

上 村「季節の変わり目なんて、」
蓋を閉じようとするが、重くてなかなかうまくいかない。

大 悟「手伝いましょうか」
見かねた大悟が手を貸す。

上 村「仕事、バンバン入るから」
二人、そのまま話をしながら、残りの蓋も閉じていく。

大 悟「仕事ってどこから来るんですか？」
上 村「葬儀屋さん」
大 悟「葬儀屋？」
上 村「そ。納棺ってね、昔は家族でやってたものなの。それが葬儀屋さんに
まわされるようになって、そこから、また、うちみたいな会社が出来
て。言ってみれば、超隙間産業(笑う)」

美香が居間にやって来る。
その手にはビニール袋を持っている。

美 香「ただいま！」
大 悟「おかえり」
美香、ビニール袋を台所に置きながら、
美 香「蛸、もらっちゃった。ちょうどそこでお隣さんに会って、今朝、釣って来
たんだって！」
自分のデスク(大悟のいる居間)に荷物を置きに来る。

大 悟「……」
美 香「どうしたの？」
大悟の様子を察して、優しく尋ねる。

大 悟「……解散になった」
美 香「何が？」
大 悟「楽団」
美 香「……」
美香は一瞬驚くが、平静を装って明るく言う。

美 香「そう……また、次探せばいいじゃない」
大 悟「次なんて無い」
美 香「……」
大 悟「オレぐらいの腕じゃ、どうにも無理があるし……チェロの借金も…
…」

美 香「!いくら？」
大悟、指を一本立てて見せる。

美 香「大丈夫！」
美香、大悟の方に近づきながら、

美 香「百万くらいだったら、ウェブ
デザインの仕事で何とか
返せる」

大 悟「千八百万」
美 香「千…千八百万!？」
大 悟「プロはみんなそのくらいのを使ってるし、むしろ安いくらいなんだよ」
美 香「……どうして隠してたの？」
大 悟「絶対、反対されると思って……」
美 香「そんな大事なことを、なんで言ってくれなかったの？」
大 悟「……ごめん……」
頭を抱える大悟。

美香、大悟の今の心境を察して、
美 香「……ご飯、作るね」
美香、キッチンへ消える。
大悟、美香を見送り、
大 悟「……」
大悟M「世界中の街が、僕たちの新居だ。演奏旅行をしながら、一緒に生きていこう。それが、プロポーズの言葉だった。しかし現実には厳しかった。いや、もっと早く、自分の才能の限界に気づけば良かったのだ」
大 悟「……」
その時……
美 香「キァ……」
キッチンから美香の悲鳴が聞こえる。
大 悟「どうした？」
大悟、慌ててキッチンに行くと、お隣さんからもらったビニール袋が床に落ちている。
美 香「この蛸生きてる」
大 悟「ホントだ…生きてる」
美 香(オフ)「ちょっと ねえ 大ちゃん… どうしよう」
ビニール袋から飛び出した蛸の足がモゾモゾ動いている。

の お台場の水際(夜)

大悟がビニール袋の中の蛸を海に戻そうとしている。
大 悟「(蛸に語りかける)はあ～ もう釣られるなよ」
蛸を手取る大悟。海に放り投げる。
だが、ぐったりと浮かんでいるだけ。
大 悟「あれ？」
プカプカと浮かんでいる蛸を大悟はしばらく見つめている。
すでに死んでいるのか？ まだ生きているのか？ 分からない。
汚れた東京の海に浮かんでいる哀れな蛸が、自分に重なって見える。

大 悟「……」

美 香「……」

大 悟「……辞めようかな」

ながら……うなだれる。

17 同・外

朝。

美香に見送られて大悟が自宅を出る。

大 悟「そんなに遅くならないと思うよ」

美 香「いつてらっしゃい」

大悟、美香を軽く抱きしめ、

大 悟「じゃね」

大悟、手を振って歩いていく。

笑顔で見送る美香。

18 自宅近くの橋の上

橋を渡って会社へ向かう大悟。

美香に自分が見えないのを確認して、ポケットから黒いネクタイを出して締める。

19 NKエージェント・内

棺を拭いている上村。

ドアを開く音がして上村が振り向くと、大悟が入り口に立っている。

上村、大悟のことをまじまじと見つめる。

上 村「おはよう」

大 悟「よろしくお願ひします」

上 村「新しい机が来るまで、社長の席使って」

大 悟「(うなづく)」

大悟、佐々木のデスクの方へ動くと、

上村、自分のデスクに来て、名刺のケースを取り、

上 村「あ、名刺出来たわよ」

大悟の前に置く。

上 村「誤植なし！」

鳥

美 香「やったあ! じゃあお祝いだ、今日は」
大 悟「…ああ」
優しく微笑む美香。
大悟、美香に合わせて苦笑いする。
美 香「で、どんな仕事だったの? やっぱり添乗員とか?」
大 悟「え?いい、いや……」
逃げるように家の中へ入っていく大悟。
あとを追う美香。

16A

同・1階

入って来る大悟と美香。
美 香「営業?」
大 悟「……」
大悟の表情が曇る。
美 香「どうしたの?」
大悟、階段の下へ行って靴を脱ぐ。
(一階は土足で、ココで靴を脱いで階段を上がるようになって
いる)
大 悟「旅行代理店じゃなかったんだ」
すぐ横のキッチンでお土産を開け始める美香。
美 香「ふーん、何?」
大 悟「冠婚葬祭関係……」
美 香「ん?結婚式場!？」
大悟、階段を上がりながら、
大 悟「あ…(あいまいな返事)」
美 香「結局、またチェロ弾かされたりしてね(笑う)」
大 悟「……」
大悟、階段を上っていく。
美香(オフ)「あ、すぐ準備するね、すぎ焼き」
大 悟「…うん…」
美香(オフ)「うれしい～ あ～ おいしそう～ よし あ、白滝あったか
な?」
大 悟「……」
大悟、階段の上にある椅子に座り込み、美香の様子を気にし

美 香「何を?」
大 悟「チェロ」
美 香「辞めてどうするの?」
大 悟「田舎に帰る。山形の……」
美 香「……」
大悟を真顔で見つめていた美香、突然、明るい表情で、
美 香「賛成!(と手をあげる)」
大 悟「え?いいの?」
大悟、拍子抜けする。
美 香「だって、お母さんが残してくれたお家だったら、家賃もいらなくて
しょ」
大 悟「いや、でも本当にいいの?」
美 香「うん!」

〇

楽器買い取り専門店

大悟が差し出した鑑定書を見ている主人。
店の主人「いい楽器ですね…」
大悟のチェロを鑑定している鑑定士。
f字孔を覗き込んだり、チェロを持ってクルクル回してみたり、
エンドピンを立てて回してみたり。
大悟M「人生最大の分岐点を迎えたつもりだったが、チェロを手放した途端、
不思議と楽になった。今まで縛られていたものから、スッと解放さ
れた気がした。自分が夢だと信じていたものは、た
ぶん、夢ではなかったのだ」
店を出て行く大悟。

M5:2'11"

画面 黒にフェードアウト

二

庄内平野

秋を思わせる庄内平野の風景。

二

民家(大悟の母親の家)・外

川沿いに建つ二階建ての家。

玄関に「スナック和」と書かれた看板。(その横にもっと古い看板で「コンチェルト」の文字も見える)

大悟M「二年前に死んだ母が、」

13 同・1階

大悟M「たった一つだけ残してくれた財産」

一階には、たくさんのレコードが置いてあり、その片隅に大悟の母の写真が飾られている。

ここは、かつてスナックとして使われていたようだ。

しかし、それにはJBLのスピーカーがあるなど、やけに洒落ている箇所もある。

大悟M「最初は、父が喫茶店をやっていたらしいが、僕にはほとんどその記憶がない。父が愛人を作って家を出たあと、母はここでささやかなスナックを営み、女手一つで僕を育て上げた」

店の台所で料理をしていた美香が二階に向って、

美 香「ご飯、できたよ」

13A 同・二階

二階で新聞・情報誌を見ていた大悟が返事をする。

大 悟「は〜い」

13B 同・一階(時間経過)

食卓の上に、素朴な朝食が並んでいる。

大悟と美香、朝食を食べている。

満足そうに食べる美香を見て、くすつと笑う大悟。

美 香「ん？」

大 悟「田舎暮らし、もっと嫌がるかと思ってた」

美 香「うん、結構、新鮮! なんかお水が違うせいかな、ご飯もおいしく炊けるし」

大 悟「ふーん」

大 悟「ああ〜」

佐々木「まあ、これも何かの縁だ。とにかくやってみて……向いてないと思ったら、やめりゃいいさ ね」

大 悟「いやあ……」

佐々木「これ今日の分」

佐々木、自分の財布から一万円札を二枚出して大悟の目の前に出す。

大 悟「!あ、いえいえ、そんな……」

佐々木「大丈夫、大丈夫!」

大 悟「いえいえ……そんな……」

佐々木、大悟に無理矢理お金を握らせる。

大 悟「……」

佐々木、不気味に笑う。

大 悟「あ……」

見ている上村。

91 大悟の自宅・外

川辺で夕暮れの街を見つめている美香。

帰ってくる大悟。

大 悟「ただいま」

美 香「おかえりー」

大 悟「これ」

大悟、土産を美香に渡す。

美 香「どうしたの、コレ？」

大 悟

「こっちに越したら、すき焼き食いたって、言ってたよね」

美 香「(期待を込めて) 米沢牛？」

大 悟「特上のサーロイン」

美 香「すご〜い。高かったでしょう？」

大 悟「一 給料、先にもらえたから」

大悟、家の方へ歩き出す。

美 香「え? 仕事決まったの？」

続く美香。

大 悟「…うん、まあね」

大 悟「ちょ、ちょっと待ってください。あの、まだ何も。あの、給・給料とか、もろもろ…」

佐々木「ああ、そっか。最初は、片手でどう？」

タバコをくわえる佐々木。

大 悟「片手？」

佐々木、タバコに火をつけながら、五本の指を広げる。

大 悟「五……万円、ですか？」

佐々木「五十」

大 悟「五十万！」

佐々木「少ない？」

大 悟「いえいえ。そ、そんなにいただけるんですか」

佐々木「何なら現金日払いでもいいけど」

大 悟「いや、あの、で、どんな仕事をすれば……」

佐々木「そうだなあ～ まずは、僕のアシスタントだな」

大 悟「あの…具体的には？」

佐々木「具体的？(サボテンの鉢を手にとって)納棺」

大 悟「のうかん??」

佐々木「遺体を棺に納める仕事。咲いたなあ」

大 悟「……遺体って、死んだ人のことですか？」

佐々木「君、面白い質問するね」

佐々木、ニヤリとした顔を、大悟に近づける。

台所で上村も微笑んでいる。

大 悟「あ～いや、あ、あの…そのう……募集広告には、旅のお手伝いをするって書いてあったので、僕は、てっきり旅行代理店かな、と……」

大悟、求人欄の切り抜きを佐々木に見せる。

佐々木「あ～、こりゃ誤植だ」

大 悟「誤植？」

佐々木「旅のお手伝いじゃなくて、安らかな、」

と、赤ペンを出して、切り抜きの「旅」の文字の後に「立ち」という文字を足す。

佐々木「旅立ちのお手伝い」

大 悟「旅立ち…」

お茶を運んできた上村が微笑んで見ている。

佐々木「だから、NKは納棺のNK」

と、切り抜きを大悟に返す。

愕然となる大悟。

美 香「……うーん、私お店とかやってみようかな？」

大 悟「えー？なんの？」

美香の話聞き流して新聞のチラシに視線を移した大悟、何かを見つける。

大 悟「これだ！」

美 香「？」

大 悟「これこれ」

大悟、美香に新聞チラシの求人広告を見せる。

美 香「年齢問わず、高給保証」

大 悟「しかも、実質労働時間わずか!正社員で」

美 香「NKエージェント?……何の会社？」

大 悟「旅のお手伝いをするお仕事です……旅行代理店かな」

美 香「ああ、添乗員とか？」

大 悟「未経験者歓迎って書いてあるから。とりあえず話だけ聞いてくるよ」

美 香「うん」

第二巻

14 NKエージェント・外

大悟、求人募集の切り抜きを片手に、『NKエージェント』を探している。
そして、不思議な佇まいのビルに辿り着く。
レトロな三階建てのビルだ。

大悟「これだ…」

15 同・内

扉を開けて、大悟が入って来る。

大悟「ごめんください」

ちょうど台所からお茶の用意をしたお盆を持って、一人の中年女性がけだるそうに現れる。
事務員の上村百合子である。

大悟「こちら、NKエージェントさんですか？」

上村「はい…」

大悟「午前中にお電話した小林と申します」

上村「ああー、面接の人。社長すぐ戻るから、ここ座ってて」

上村は自分のデスクへ。

大悟「はい。失礼します」

大悟、室内を見回す。

広い空間の一角に、事務机が二つと応接セットがある。

場に似つかわしくない観葉植物や花をつけたサボテン。

改めてじっくりと見ると、やはり奇妙な空間……

何よりも不思議なのは、部屋の片隅に棺が置かれていることだ。

大悟「……」

上村、そんな大悟を見て薄笑い。

自分のデスクに座り、用意したお茶を入れながら、

上村「私ね、社長が新聞に出すって言ったとき、反対したの」

大悟「はあ」

とんびの鳴き声

上村「この業界、特に人集め難しいから」

大悟「あのお、こちら、何の会社なんですか？」

上村「あれ？アナタ、何も知らんで来たの？」

大悟「旅のお手伝いをするって……」

上村「(笑って)」

大悟「あ…ち、違うんですか？」

答えずにニヤリとしてお茶を飲む上村。

そこへ、社長の佐々木生栄が外から帰って来る。

上村「あ、社長！面接の人」

振り返った佐々木、大悟に気付く。

大悟「はじめまして。午前中にお電話した小林です」

佐々木、無言のまま、大悟の顔をまじまじと覗き込んで、

佐々木「ああ、君か。電話より、明るいね」

自分のデスクに向かい、上着を脱ぐ。

大悟「はあ、ありがとうございます」

佐々木「(上村に)ほら、(新聞に)出して良かっただろ。お茶いれて」

上村「はい」

立ち上がる上村、台所へ。

佐々木、大悟の前へ来る。

大悟「一応、履歴書を持ってきました(と、履歴書を渡す)」

佐々木「はいはい。どうぞ」

佐々木、履歴書を受け取って、ソファに座るよう促す。

大悟「失礼します」

だが、佐々木は封を切ろうともせず、机の上にぼんと投げ置く。

大悟「……」

二人、ソファに向かい合うように腰掛ける。

佐々木、しばらく大悟をみつめて、

佐々木「一うちでどっぷり働ける？」

大悟「え？ええ、まあ」

佐々木「採用！」

大悟「へ？」

佐々木「あ、名前、何だっけ？」

大悟「あ、小林大悟です」

佐々木「すぐ名刺刷って」

と、台所にいる上村に声をかける。

上村「はい」

とんびの鳴き声